

ユーフラテス河沿いのテル・ガーネム・アル・アリ遺跡から出土する石器の起源をさぐる

Lithological backgrounds of the stone tools from the Tell Ghanem al-Ali archaeological site in the Middle Euphrates

桂田 祐介^{1*}, 東田 和弘¹, 星野光雄¹, 齊藤 毅², 田中 剛¹, 中村俊夫¹, 吉田 英一¹,
ナランハーン マンチュク³

Yusuke Katsurada^{1*}, Kazuhiro Tsukada¹, Mitsuo Hoshino¹, Takeshi Saito², Tsuyoshi Tanaka¹,
Toshio Nakamura¹, Hidekazu Yoshida¹, Manchuk Nurumkhaan³

¹名古屋大学, ²名城大学, ³モンゴル科学技術大学

¹Nagoya University, ²Meijo University, ³Mongolian Univ. of Science & Technology

シリア・アラブ共和国北東部に位置するユーフラテス河中流域のビシュリ山地一帯は、アッシリアやバビロンなどの西アジア古代王国の創建集団といわれるセム系民族の原郷であると考えられている。中東の都市は、一見してひとつの街のように見えてもその内実は様々な部族の集団である。すなわち、中東の都市には依然として部族社会の原理と枠組みが内包されている。その部族性の起源である「セム系部族社会」について理解する事は、近年、現代国際社会において重要性を増している。

本研究では、「セム系部族社会の形成過程の解明」に資する目的で、ユーフラテス河沿いに位置するテル・ガーネム・アル・アリ遺跡（前期青銅器時代）から出土する石器の岩質調査と遺跡周辺の地質調査、およびビシュリ山地の石器との比較を行い、遺跡から出土する石器の材料石の起源について考察を行った。

【テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の石器】

遺跡は考古学調査隊によって2箇所の矩形を設置して発掘が行われており、多数の石器が考古遺物として保管されている。しかし、矩形の外側の地表にも多くの石器が散在しているため、なるべく多くの情報を得るために矩形の内外で見つかる石器を調査対象とした。考古遺物として記載済みの石器については、すでに発掘されたものから400個以上をランダムに選んでその径と岩質を調査した。地表に散在する石器については、テル全体からランダムに石器を採取する方法と、約10メートル四方の範囲内の全ての石器を採取する2とおりの方法で合計約500個の石器を収集し、その径と岩質を調査した。その結果、いずれも石器は珪化した細粒凝灰岩が90%以上を占め、他の岩質（流紋岩、石英脈岩、チャート、玄武岩など）は3~8%程度であった。また、石器の一部に礫としての自然円磨面を有するものが約80%以上含まれている。珪化細粒凝灰岩の石器は有孔虫化石を、チャート石器は放射虫化石を多産する。ごく稀ではあるが、もともと石器だったものが河川作用によって円磨された「石器礫」を再度割って作ったりサイクル品も含まれている。

【ビール・スバイ遺跡の石器】

遺跡の近傍に珪化した凝灰岩層があり、ここに産する石器は凝灰岩層に由来するものと考えられる。石器は全てが珪化した細粒凝灰岩であり、石器の一部に礫としての自然円磨面を有するものは皆無である。石器と凝灰岩層はともに有孔虫化石を多産する。

【テル・ガーネム・アル・アリ遺跡周辺の地質】

遺跡周辺には、第三紀の珩長質凝灰岩挟在石膏層と、それを不整合に覆うユーフラテス河の河川堆積物が分布する。石膏層に挟まれる凝灰岩は細粒であり、しばしば有孔虫や貝化石のキャストを含む。凝灰岩層には、ビール・スバイ遺跡周辺のような珩化部は見られない。河川堆積物は砂層と礫岩からなり、礫はよく円磨され、細粒珩質礫にはパーカッションマークが顕著に見られる。今回、礫層4地点と現在の河床1地点から石器に適した礫径の礫をランダムに合計500個以上採取し、その岩質を調査した。礫層には珩化した細粒凝灰岩、珩長質火山岩類、石英脈岩、チャート、変成岩類、深成岩類、苦鉄質火山岩類などの礫が含まれ、珩化した細粒凝灰岩礫は全礫種の5～20%程度であった。しばしば珩化細粒凝灰岩は有孔虫化石を、チャートは放散虫化石を多産する。礫層には、わずかながら珩化細粒凝灰岩の「石器礫」(全礫の3%以下)が含まれている。

【テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の石器の起源】

以上のように、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の石器の多くには礫としての円磨自然面が認められ、ビール・スバイ遺跡の石器とは明らかに外形形状が異なっている。このことから、前期青銅器時代において、両地点の間で石器の流通があったとは考えにくく、独自の社会を形成していた可能性を示唆している。また、遺跡周辺に珩化細粒凝灰岩層が存在しないことと、石器の多くに礫としての円磨自然面が見られることは、この遺跡を残した人々が周辺の礫を石器の材料に使用していたことを示唆している。

しかしながら、遺跡から出土する石器の90%以上が珩化細粒凝灰岩を材料とする一方で、礫層には珩化細粒凝灰岩は5～20%程度しか含まれていない。このことは、当時の人々が、礫層から石器に適する材料を厳選していたことをうかがわせ、ビール・スバイ遺跡のような材料の採掘場を必要とせずに石器を獲得する生活を営んでいたことを示唆している。

キーワード:石器,礫,珩化細粒凝灰岩

Keywords: stone tools, gravels, fine silicious tuff